

戦争は二度と起こしてはならない

2B 長野県立大学 内山知哉

私は今回の訪中団を通して、戦争の恐ろしさと歴史教育、中国の技術力の3つのことを考えました。

1つ目は戦争の恐ろしさです。今回の訪中団で訪れた歴史博物館には戦時中、今まで日本が中国に行ってきたことが展示されていました。そこには元々私が義務教育を通して勉強してきたことも多くありましたが、知らなかったことも多くありました。当時の様々な背景はあるけれど、日本軍がこんなにも酷いことを行っていたことにとても悲しくなりました。満州での大量虐殺、虐待、人体での細菌実験、これらのことは日本の教科書にも掲載されており、事実としての知識はあったのですが、被害を受けた国側の意見や主張は少し異なっていてとても勉強になりました。そして戦争は2度としてはならない、誰も幸せにならないことを再認識出来ました。加えて、今回訪れた2つの博物館のあとがきには同じことが書かれていました。[歴史は最高の教科書であり、自省するための薬である]と書かれており、歴史において加害者や被害者関わらず、過去に起こったことを参考にして未来の行動を自省することが大切だと考えました。

2つ目は歴史教育についてです。今回訪れた博物館はとても広大で、多種多様な展示物が置かれていました。このような博物館は過去の歴史を後世に伝え、未来を変える力があると考えています。しかし、同時にあまりにも博物館が大規模だとそれに対して抱く感情も大きいと思いました。私は日本人だけど、もし中国人で抗日戦争の博物館を訪れていたら、日本から酷いことをされた祖先を博物館で見て日本を嫌いになると思いました。反日の感情を抱く人も多くいると思います。博物館で歴史を正しく学び、学んだことによって誰かを憎むのではなく、未来に目を向けて世界平和に向いてほしいと思いました。

3つ目は中国の技術力です。私たちは2日目に中国共産党歴史展覧館を訪問しました。そこで乗り物に乗り、中国全土の主要な都市を巡るというアトラクションと中国の新幹線や衛星機などを紹介し、技術力や中国発展の歴史を紹介するというアトラクションに乗りました。まず博物館にアトラクションを作るという発想が日本にはあまりない発想で、博物館の規模の大きさに驚きました。今まで経験したことがなかったアトラクション形式で、中国の歴史や技術力を知れて勉強になりました。博物館自体もとても広大で、抗日戦争のことや中国国家成立何周年の軍事行動のことを知り、日本との関係について考えられました。他にも色々な博物館を巡り、その都度中国の技術力の高さに驚かされました。広大な土地を利用しながら、大規模に開発を進めていく背景には政府の権力の高さもあるのではないかと考えました。日本、中国、それぞれの国の強みを活かして経済を発展させている事が理解できました。

今回の訪中団では博物館を訪問することがとても多かったのですが、プライベートでは絶対に行かないような博物館を見て、とても勉強になりました。この経験を将来の自分に活

かせるように目の前の勉強に精一杯励んでいきたいと思います。

「私の中の中国」

2B 三重大学 津田乃愛

私は今回の一週間で、北京、長春、瀋陽の三都市を巡り、中国の文化や産業、そして歴史について学びました。

文化について特に印象的だったのは世界遺産である万里の長城への訪問です。実際に目の前に立つと、その長さと雄大さに圧倒されました。歴史の教科書で写真を見たことはありましたが、今回の訪中で一番訪れることが楽しみな場所でした。実際自分の足で石の階段を登ると、果てしなく続く階段に気がめいりそうでしたが、これを建設した当時の背景を考えると、昔の人々がどれほどの努力をしてこの城壁を築いたのかを強く感じました。見晴らしの良い場所から振り返ると、今回の訪問を通して、万里の長城はただの観光地ではなく、長い歴史と人々の努力が積み重なってできた文化遺産だということを実感しました。これからも大切に守っていかなければならない宝だと思います。

産業について特に印象的だったのは各都市をバスで移動するときに見た街や自動車です。瀋陽では街路樹が整備されており、イメージより街に緑が多いと感じました。また一区画に同じようなマンションが建設されているのを見て、都市開発を区画的に行っていることが分かりました。中国ではナンバープレートが普通車は青、電気自動車は緑と決まっています。明らかに日本より電気自動車の普及率が高く、環境に配慮しているイメージがあまりなかった中国の認識が変わりました。

歴史について特に印象的だったのは東北陥落史陳列館と「九・一八」歴史博物館を訪問し日中間の戦争の歴史について学んだことです。私は高校で歴史を選択しておらず義務教育程度の知識しかありません。また日本の教科書の特徴として事実を淡々と追っているため、出来事の背景にある人々の思いや悲しみ、怒りといった感情まで深く理解することは難しいと感じていました。しかし、現地の博物館では、当時の写真や遺品、被害者の証言が展示されており、文字だけでは伝わらない歴史の「重さ」を体感しました。戦争が地域社会や人々の生活をどのように変えてしまったのかを、より具体的に理解できたと思います。引率して頂いた中国人の方が、日本人は戦争を引き起こした人とそれに巻き込まれて二つに割けられると、それが戦争で日本軍に家族や家を失っても残留孤児の日本の子供を育てた中国人の思いが伺えるという言葉に感銘をうけました。

今回の訪問から日中間の関係をよりよくするために自分ができることが何か考えたとき、それは自分が肌で感じた中国を周りの人に伝えることだと思います。中国の悪印象がSNSで拡散されている今、自分一人で両国の関係に直接関わることはできませんが、自分の周りだけでも中国に対しての印象を少しだけ身近なものに変えられることはできると思います。実際に見て、聞いて、感じた体験を言葉にすることで、相手を知るきっかけを作り、互いに理解を深める小さな架け橋になりたいと考えています。

日中友好協会の派遣事業として、一週間にわたり中国を訪問し、北京・長春・瀋陽の三都市を巡る機会を得た。初めて本格的に中国を訪れた私にとって、この研修は新鮮な驚きと学びに満ちていた。訪問先は多岐にわたったが、その中でも特に印象に残った場所と体験について記しておきたい。

最初に訪れた北京では、多くの歴史的・文化的施設を見学した。その中でも強く記憶に残ったのは、中国共産党歴史展覧館と故宮である。歴史展覧館では、党創立から今日に至るまでの歩みが膨大な資料と映像を通じて展示されており、20世紀から現代にかけての社会変化を体系的に理解することができた。そこでは、政治史という枠を越え、社会の発展や人々の生活がいかに変容してきたかを実感できた点が興味深かった。また、故宮では広大な敷地に展開する建築群を実際に歩き、その規模の大きさと保存状態の良さに圧倒された。門や殿ごとに異なる空間構成を持ち、建築が果たしてきた権威的・儀礼的役割を肌で感じ取ることができた。これら二つの訪問を通じて、中国の歴史と文化の厚みをあらためて認識するに至った。

次に訪れた長春では、伝統工芸と教育の両面から印象深い体験を得た。特に魚皮絵の制作を体験したことは忘れがたい。魚の皮という身近な素材を丹念に加工し、模様や質感を生かしながら作品を仕上げる過程は、見た目以上に根気を必要とする作業であった。実際に手を動かしてみることで、書籍や展示では理解しきれない手仕事の細やかさを実感することができた。また、吉林大学では現地の学生と交流する機会が設けられた。彼らは限られた学習期間で日本語を身につけ、将来について真剣に語る姿勢が印象的であった。互いに言葉を通じて考えを交換することで、文化の違いを超えた共感が生まれることを体験的に理解した。この経験は、国際交流の重要性をあらためて認識させるものであった。

最後に訪れた瀋陽では、9月12日に九・一八歴史博物館を訪問した。この日付は満洲事変を記憶する「九月十八日」に極めて近く、訪問そのものに特別な重みを感じた。館内には当時の写真、映像、文書、遺品などが体系的に展示されており、1931年の出来事が地域社会と人々に与えた影響が鮮明に伝えられていた。展示を通じて、戦争の記憶をどのように後世へ伝えるのかという課題に直面したように思う。9月12日という日にこの施設を訪れたことで、歴史を単に「学ぶ対象」としてではなく、「今を考える手がかり」として受け止める重要性を一層強く感じた。

今回の研修を通じて学んだことは、一言でいえば「中国の現在を歴史とともに理解する」という点に尽きる。北京では政治と文化の連続性を、長春では伝統と教育の力を、瀋陽では歴史の記憶と平和への意識を、それぞれの現場で実際に体感することができた。メディアや書籍を通じて得られる知識とは異なり、自ら現地に立ち、人々と交流し、空間を歩くことによってのみ得られる理解が確かに存在することを強く実感した。

一週間という短期間であったが、三都市での経験は私の中国観を大きく変え、今後の日中関係を考える上でも貴重な糧となった。このような機会を提供してくださった関係者の方々に深く感謝したい。

「知る義務」と「伝える責任」

2B 慶應義塾大学 岡野扇弓

日中友好大学生訪中団の一員として中国の地を踏んだ一週間は、私にとって、歴史と向き合い、自国を再認識する旅となった。北京の壮麗な景色から始まり、長春、そして瀋陽へと北東部を巡る旅路は、単なる観光ではなく、まるで歴史の断層を辿るかのような、重く、そして示唆に富んだ体験だった。その中でも、特に心に深く刻まれたのは、長春の東北陥落史陳列館と、瀋陽の「九・一八」歴史博物館での経験である。これらの訪問地は、私の中にあった歴史観を揺さぶり、日本人としての「知る義務」と「伝える責任」について深く考えさせられる契機となった。

訪中前から、これらの地がもたらすであろう衝撃は想像に難くなかった。しかし、実際に足を踏み入れた瞬間に感じたのは、予期していた以上の張り詰めた空気、そして言葉にならないような重圧感だった。「九・一八」歴史博物館の入り口に立った時、私はその空間が過去の悲劇の記憶で満ちていることを肌で感じた。展示物の数々は、日本で触れる機会の少ない、生々しい記録の連続だった。そこには、軍事的な戦略や政治的な背景の羅列ではなく、一人ひとりの人々の生活が破壊され、尊厳が奪われていった事実が、被害者視点から鮮明に描き出されていた。そこで私は、教科書で学んできた歴史が、時に抽象的な出来事として頭の中で処理されていたことに気づかされた。これらの展示は、私たちに「当事者ではない」という距離を許さず、その痛みや悲しみを追体験させるものであった。それは、単に歴史を「知る」という行為を超えて、その歴史を背負う人間としての自覚を強く促すものであった。

この体験は、私の中に一つの大きな疑問を投げかけた。なぜ、日本ではこのような「被害者視点の歴史」を伝える博物館が少ないのだろうか。もちろん、日本にも多くの戦争に関する資料館や記念館は存在する。しかし、中国で目にしたような、加害の歴史を真正面から捉え、その悲惨さを詳細に伝える展示は、まだまだ限られているように感じる。この歴史認識のギャップは、単に情報量の問題ではなく、歴史をどう語り継ぐか、という根本的な姿勢の違いに起因しているのかもしれない。この疑問は、訪中中に強く感じた、中国の人々の自国に対する強い愛国心へと繋がっていく。戦争記念日が近づけば、今でもデモが行われるなど、彼らにとって歴史は過去の出来事ではなく、現在を生きる自分たちのアイデンティティを形成する重要な要素なのだ。それは、単に国を愛する感情的なものではなく、自国の歴史を深く理解し、民族としての誇りを守ろうとする、知的で成熟した意識に支えられているように感じられた。一方で、日本に目を向けると、特に若い世代において、自国への関心や歴史に対する意識の希薄さが指摘されることが多い。選挙の投票率の低さや、政治への無関心はその一例だろう。もちろん、これは単純な比較論ではないし、国ごとに社会背景や歴史的経緯は異なる。しかし、自国の歴史を深く知ることが、自国への帰属意識や、ひいては健全な愛国心を育む土壌になるのではないか、という私の考え

は、今回の訪中でさらに強固なものとなった。

国際情勢が目まぐるしく変化し、複雑な関係性の中で日本がどういう立ち位置を取るべきかが問われている今日、この「知る義務」と「伝える責任」の重要性は、かつてないほど高まっている。歴史を知ることが、単に過去を振り返るだけでなく、未来を築くための羅針盤となる。加害の歴史を直視し、そこから何を学び、どう反省を活かすかを考えることは、日本が国際社会の一員として信頼を築き、共存していく上で不可欠なプロセスだ。そして、その知見を次世代に、そして国際社会に伝えていく責任がある。それは、特定のイデオロギーを主張するためではなく、歴史を共有し、互いの痛みを理解し合うための第一歩となる。今回の訪中を通して、私たちが身につけるべきは、単なる知識の羅列ではなく、歴史の重みに真摯に向き合い、異なる視点を尊重し、そして平和を希求する心なのだと感じた。また、私たち日本人が、この「知る義務」と「伝える責任」をどれだけ真剣に遂行できるかが、今後の日本、ひいては国際社会における私たちの最大の武器となり得るということだ。それは決して排他的なナショナリズムではなく、歴史から学び、他者と共存しようとする、より成熟した意味での愛国心へと繋がる道である。私は、この旅で得た学びを胸に、これからも自らの役割を問い続け、行動していきたい。

「学びと変化」

2B 大阪大学 勢溜萌依

今回の訪中に参加する前は中国に対する良いイメージがあまりなく、見学場所についてもあまりなじみのない場所ばかりでとても不安だった。しかし訪中を終えて私の中で多くの変化が生まれた。

まず私の中で中国のイメージが大きく変化した。特に北京、長春では教科書で見えるような大気汚染を感じることは少なく日本よりも湿度が低い、気温が低いことも相まってとても過ごしやすく感じた。路上にもゴミ箱やごみ回収を行っている人が多く日本よりも道がきれいだとも感じた。また出会う方々がとてもやさしく温かい人が多いと感じた。私が今まで持っていたイメージを大きく転換させる一週間となった。

次に歴史に関する見方が変化した。今回の見学では第二次世界大戦終結から 80 年ということもあり、日中戦争に関連する博物館を多く訪れ、戦争の歴史について中国の視点から学ぶことができた。その中でも特に各地で抗日戦争勝利 80 周年と書いてあったことがとても印象に残っている。私たち日本人は 1945 年と聞くと終戦の年、被爆の年という被害者側の記憶を呼び起こしてしまいがちだが、中国からすると 1945 年というのは抗日戦争に勝利した年という記憶が残っているという違いを学んだ。私たちは学校で日中戦争の歴史についてはあまり深く学ばない。その影響もあり中国東北地方の人たちが受けた苦しみを今までほとんど知らなかった。今回中国の立場から歴史を振り返り歴史から学ぶことで歴史認識も片側に偏ってはいけなかったと感じた。また、日本人として戦争の記憶を継承している博物館を訪れることにも意義を感じた。旅行で中国を訪れるとほとんど訪れることはないだろう戦争の歴史を学ぶことができる博物館に訪れ、歴史に真摯に向き合うことで生まれる新たな日中関係もあるのではないかと感じた。さらに訪中している最中に私たちがたくさんの日中友好を願っている方からいただいた言葉、平和を願う言葉が心に残っている。特に展示の中にあった「歴史を忘れることは裏切りである」というフレーズが私の心に刺さってきた。大学受験もあり私にとって歴史は暗記するもの、過去に起こった出来事を知っていれば大丈夫という認識を持っていた。しかしこの言葉はただ起こったことをそのまま記憶しているのではなくその場にいた人たちの感情や空気感も含めて想像し、過去の歴史を未来につなげていく必要があると訴えているように感じた。今回の訪中で初めて知った新たな日中の戦争の歴史、記憶を私の中に残していきたいと思う。

また今回の訪中で 1 週間を共に過ごした仲間との出会いは大きな変化をもたらした。この訪中団には日本各地から専攻も年齢も関係なく大学生が集まってくる。普通に大学生活を送っていたら出会わなかったような人と出会う貴重な経験となった。私の今回のテーマは日本人中国人関係なくたくさんの人と出会い人の輪を広げることだった。1 週間過ごしたたくさんの会話を重ねる中でお互いの考え方や価値観に触れることができ、人間的に尊敬できる人とたくさん出会えた。ただの学力とは違う人間力の高さや発信力、リーダー

シップの強さを感じ取ることができた。たくさんの尊敬できる人と出会えたおかげでこれからの大学生活でどうすればもっと成長できるのか、社会に出て行くときにどのような力があれば人とうまく関係を築けるのかについて真剣に考え実行に移す勇気をもらい、これから行動に移していこうと決意した。

たくさんの人と出会いたくさんの貴重な経験を積むことができた今回の訪中に参加できてとても良かった。私たちの1週間の旅を支えてくださった皆さんに心から感謝している。たった1週間でこれほどまでに私に変化をもたらした訪中での経験を糧に自分の将来の目標を達成していく。今回の訪中が少しでも日中友好の架け橋になれていますように。

私は、今回の訪中研修を通じて、私は歴史と文化、そして現代中国の姿に直接触れることができ、大変貴重な体験となりました。まず印象的であったのは万里の長城です。実際にその石畳の階段を一步一步登っていくと、想像以上に陰しく、かつ雄大な光景が広がっていた。写真や教科書で見たことは多くあったが、実際にその場に立つことで、かつての人々が国家を守るために膨大な労力を注いできた歴史の重みを肌で感じることができた。この体験を通じ、歴史を知識として学ぶだけでなく、自らの身体を通して実感することの大切さを改めて認識した。

また、中国共産党歴史展覧館や「九・一八」歴史博物館、遼寧省博物館といった施設を訪れたことも大きな学びであった。そこでは近代以降の戦争や侵略の歴史が丁寧に展示され、中国が自らの過去をどのように捉え、後世に伝えようとしているのかを知ることができた。日本人としてその展示を見学することには複雑な思いもあったが、歴史を共有する難しさと同時に、だからこそ率直に学び合い、向き合う必要性を強く感じた。歴史認識は両国間の敏感な課題であるが、互いに理解しようとする姿勢を持つことが未来志向の関係に欠かせないと考えるようになる経験でした。中国の後世に伝えようとする気持ちがしっかり出ていて、印象に残りました。

一方で、大学訪問や文化体験を通して得た交流も非常に意義深いものでした。吉林大学や瀋陽師範大学では、同世代の学生と率直に意見を交わし、互いの関心や日常生活について語り合った。そこでは、文化や歴史の背景が異なっても、共通する話題や感覚があることに気づかされ、国境を越えて理解を深めるきっかけになることを実感した。特に印象的であったのは、私が学んできた中国語を使って現地の学生と直接やり取りできた瞬間である。文法的に拙い表現であっても、言葉を通じて心が通じ合う体験は何にも代えがたいものであった。私はこの経験を通して、言語を学ぶ意味を体感的に理解した。言葉は単なる知識の習得ではなく、文化や歴史に近づき、人と人とを結びつける架け橋となる。今回の訪中は、語学学習の動機づけを強める大きな契機になった。

さらに、故宮や紅梅文創園といった文化施設を訪れる中で、中国が自国の文化遺産を保存しつつ積極的に公開・活用している姿勢に触れることができた。観光資源としての利用だけでなく、教育や国際交流の場としても機能させている点は非常に印象的であった。団員と1週間という短い期間であったが、交流をして、学生同士が意見を出すことにより、自分だけでは考えられなかった考えを知りとても興味深く感じた。この一週間は自分にとって忘れられない体験でした。

総じて、今回の訪中を通じて私は、歴史を直視する姿勢と未来志向の交流の両立が、日中関係の発展に不可欠であることを強く感じた。そして、言語を学ぶことがその基盤となることを、自分自身の体験から確信した。短い期間ではあったが、見聞きしたことや感じ

たことを今後の学びに活かし、相互理解のために自分にできることを考え続けていきたい。

最後に、今回のような貴重な機会を与えてくださったすべての関係者の皆様、スケジュールの日程の中で最善を尽くして支えてくださった現地の方々、そして充実した時間を共に過ごした仲間たちに、心より感謝申し上げたい。

私は今回の訪中研修を通して、これまで日本ではなかなか触れることのなかった歴史や人々の思いに直接向き合うことができた。日本にいと、日本が加害者となった歴史を詳しく学ぶ機会に限られており、教科書やニュースで断片的に知る程度であった。しかし、今回訪れた9・18歴史博物館や中国共産党歴史展覧館では、戦時中に日本が中国に対して行ったことを詳細に知ることができた。展示されていた写真や資料の中でも、民間人が受けた被害を示す写真や当時の文書に直接触れられたことは特に心に残った。日本の教科書ではほとんど触れられない出来事を目の当たりにし、歴史の重みと自分の無知さを痛感した。展示物の前に立つと、過去の出来事の悲惨さと、被害を受けた人々の痛みに胸が締め付けられる思いがした。正直なところ、日本がここまで厳しく批判的に描かれていることに驚きを覚えたが、それだけの事実があったということを自分の目で確かめられたことは、大変勉強になった。現地に足を運び、資料を直接見ることで学ぶ経験は、何よりも貴重であったと感じている。

一方で、こうした重い歴史的背景があるにもかかわらず、現地の人々の温かさや親しみやすさに触れられたことは、私にとって大きな驚きであり、同時に感動でもあった。現地の学生との交流も、私にとって忘れられない経験となった。紅梅文創園を訪れた際には、偶然バスケットボールをしている現地の大学生を見かけ、自分も参加してみたいと思いをかけたところ、快く「いいよ」と受け入れてくださり、一緒にプレーさせてもらうことができた。短い時間だったが、身振り手振りで簡単な会話を交わしながら体を動かし、笑い合うことができ、心から楽しいひとときだった。また、バスケットをしている間、学生たちが日本のアニメや文化について興味を持って話しかけてくれたことで、言葉の壁を越えてお互いの文化に触れ合えることを実感した。こうした体験を通じて、中国の若者に対する自分の先入観が良い意味で大きく覆され、個人同士が直接交流することで相手の人柄や価値観に触れ、お互いを理解できることを強く実感した。

そして、訪中研修の最後に参加した中日青年交流夕食会・歓送会では、遼寧大学の学生の方々と交流する機会があった。学生の方々が各テーブルに1～2人ずつ加わってくださり、食事をともにしながら和やかに会話を楽しむことができた。互いの文化や日常生活について自然に語り合い、ある学生とは日本の祭りやアニメについて話し、互いにおすすめを紹介し合った。笑いながら質問し合うことで、文化の違いを感じつつも親近感が生まれ、短時間ながら深い交流ができた。旅の締めくくりにもこのような温かい交流の場を持てたことは、今回の訪中研修をより意義深いものにしてくれたと感じている。

この訪中研修を通じて、私は先入観や一方的な情報にとらわれず、現地に足を運んで自分の目で見て学ぶことの重要性を強く感じた。これまで日本には知ることができなかった事実や、多様な人々の価値観に触れることで、自分自身の視野が大きく広がったと思

う。同時に、日本についても自分がどれほど深く理解していないかを痛感した。日本の歴史や文化をきちんと説明できるようになりたいという思いも強くなった。特に、文化や歴史を正確に伝えられる力は、今後の国際交流において重要だと感じている。

今後は、この経験を活かして中国の人々と交流する機会を増やし、相手の文化や歴史を尊重しながら学び合える関係を築いていきたい。また、先入観を持たずに他国の文化や歴史を学ぶ姿勢を大切にしつつ、日本の文化についてもより深く勉強し、自分の言葉で説明できるようになりたいと考えている。特に中国語をさらに学び、相手の母語で自分の思いや日本の文化について伝えられるようになることで、より対等で実りある異文化交流ができるようになりたい。今回の訪中で得た気づきや出会いを、今後の学びや活動に生かしていくことで、日中両国の理解と友好の一助となれるよう努力していきたい。

訪中を通してまず強く感じたのは言葉の壁の存在である。今回の旅路では吉林大学、瀋陽師範大学という2つの大学を訪れた。中国語を学んだ身としては、中国に住む大学生と相手の母国語で話せるのではないかという期待感があった。しかし、現地の大学生と交流してみて中国語では自身の話したいことの半分も語れないことを身をもって感じた。いざ会話となると拼音の微妙なアクセントの違いからか、あまり通じないことが多くあった。自分の期待とは反対の結果となったが、それでも日本に居るだけではできない経験を得られた。一方で、やはり英語は「共通語」だとも感じた。母語が異なる中国人や外国人同士がやりとりをするとき、英語を使えば最低限の意思疎通は可能になる。中国語を学ぶ立場からすると少し悔しい気持ちもあるが、現実的に英語の力は強く、国際的な場で役立つことを再確認できた。ただ同時に、「英語で伝わること」と「中国語で伝わること」には違いがある。特に今回の訪中のように中国社会や歴史に深く関わる話題に触れるとき、相手のニュアンスを正しく理解するには中国語のリスニング力が不可欠だ。英語を共通語として持ちつつ、中国語をさらに磨いていく必要性を痛感した。

また、9.18博物館を訪れた経験は強く印象に残った。展示の「序章」部分は、比較的中立的に書かれていた。侵略の事実や当時の状況を淡々と説明しており、史実を客観的に伝えようとしている姿勢が見えた。しかし、展示が進むにつれて表現の仕方が少しずつ変化していくのが印象的だった。徐々に「中国目線」や「共産党目線」が強まり、特に日本軍による細菌戦や虐殺の展示では、感情を揺さぶるような工夫が随所に見られた。たとえば「8人の女性の物語」といった具体的な人物の体験を描くことで、来館者が感情移入しやすい構成になっていた。これは歴史をただ「出来事」として並べるのではなく、「物語」として伝えることで説得力を高める見せ方であると感じた。展示には明確な政治的意図にもじみ出ていた。明らかに国家としての意志が込められているのを感じた。来館者にある種の解釈を促す構造ができているのである。この体験から学んだのは、歴史の展示や教育というのは単に「過去を伝える」だけではなく、「現在の立場や未来への方向性」を示す営みであるということだ。中国における歴史博物館は、国家としての自己認識やアイデンティティを形づくる場でもある。だからこそ、展示の仕方一つにも強いメッセージが込められている。

今回の訪中を通して私は、言葉の壁と歴史の見せ方、この二つに深く考えさせられた。言葉の面では、英語を共通語として使いつつも、中国語の力をさらに磨く必要性を感じた。歴史の面では、展示のあり方そのものが一つの「語り方」であることを学んだ。これらの気づきは、今後中国を学び、国際的な視点を持つ上で大きな土台になるだろう。

訪中のテーマ

2B 東北大学 宮崎渚

私は今回、「新しい自分になる」ことをテーマに掲げて訪中団に参加した。この訪中が初めての海外滞在であり、現地の大学生と交流するとのことで、受動的・非社交的な自分を変えなければ可能性が狭まってしまうと考え、このテーマを設定した。これを達成することができたのかどうか考察しながら、訪中において感じ、学んだことを振り返ろうと思う。長春世界彫刻公園のメインである、「友情・和平・春天」の像はとても印象的だった。この彫刻は世界各国の人々が繁栄と幸福のために集い、平和の旗を高く掲げ、友情の音を奏で、美しい春を迎えることを願って作られた。像の前で、日中友好のために中国を訪れた日本人の私たちが笑いあっているということが感慨深く思われ、この像が末永く、訪れた世界中の人々を見守ってくれることを願った。現在の恵まれた環境に感謝する一方で、過去の暗い出来事にも目を向ける機会が多かった。戦争に関して日本では、被害者だったという認識が強い。ただ、今回の訪中での見学した展示で日本は「侵略者」であったこと、9・18を忘れてはならないことを強く突き付けられた。現在も世界的に平和であるとは言えない状況だが、被害者・加害者という側面のみで判断するのではなく、その裏側にある歴史を知り、国民の思いを聞くことを意識しようと思う。

今回の訪中では、三度現地の大学生と交流する機会があった。吉林大学の学生との交流では、日本語学科の学生の日本語の流暢さに驚いた。グループごとでの対話の中で好きな中華料理やアニメの話で盛り上がり、最近の日本のカルチャーが中国に浸透していて意外だった。遼寧大学の学生には吉林大学のときよりも積極的に話しかけに行くことで、より深く交流することができ、私の拙い中国語や英語に笑顔で答えてくれたのが自信につながった。歓送会ではグループの日本人学生に対する中国人学生が少なく、あまり交流できずに残念だった。日中交流だけでなく、日々交流でも多くの刺激を受けた。その場を和ませる能力やグループをまとめる能力など、見習いたいところが溢れており、同じ訪中団の団員となれたことを嬉しく思う。

今回の訪中を通して「新しい自分」になれたかどうかは現時点ではわからない。これからの選択・行動次第で変わったと実感できるだろう。ただ、一つ言えるのは、今回の訪中が良い選択だったということだ。全く異なるバックグラウンドを持つ人とのコミュニケーションはとても楽しく刺激的で、新たな知見を得ることができた。また、これまで知識はほぼなかったといえる中国史についてその一端を垣間見ることができ、その奥深さに惹かれてより深く知りたいと考えるようになった。より一層中国語の勉強に励み、円滑なコミュニケーションがとれるようになったときには個人的に中国に再び訪れたいと強く思う。今回の訪中団にご尽力いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。これからも訪中団が日中友好の架け橋となり続けることを願います。

日本、そして中国の製造業の未来に関心を持つ私にとって、今回の訪中は深い思索の機会となった。北京から長春、そして瀋陽へと巡る中で、現代中国の発展を象徴する光景と、複雑な歴史の双方に触れた。この旅を通じて、日本と中国が真に建設的な未来を築くためには、歴史認識の問題に真摯に向き合い、その上で平和への努力を続けることが不可欠であると、改めて認識させられた。私が訪中の中で特に印象に残っているのは、瀋陽で訪れた中国工業博物館だ。広大な敷地に鎮座する数々の工作機械や設備は、中国の近代化を根底から支えてきた工業の歴史と、その圧倒的な底力を見せつけていた。また、古い工場跡地をリノベーションした紅梅文創園では、産業遺産を新たな文化創造の拠点へと転換させる中国社会のダイナミズムを垣間見ることができた。一方で、今回の訪中では私に日中間の歴史が持つ重さを絶えず問いかけてきた。長春の東北陥落史陳列館、そして瀋陽の

「九・一八」歴史博物館。これらの場所では、中国の視点から描かれた近代史が、生々しい展示と共に語られていた。特に「九・一八」歴史博物館は、満州事変の発端となった柳条湖事件の現場に建てられており、その場所に立つだけで歴史の重みがずしりと心に響いた。展示内容は、日本人として冷静に受け止めるべきものから、正直なところ、抵抗感を覚えるものまで様々だった。しかし、重要なのは、多くの人々がこの歴史認識を共有しているという厳然たる事実だ。これまで日本の視点から学ぶことが多かった歴史を、異なる側面から見つめ直す経験は、単純な善悪二元論では捉えきれない歴史の複雑さを痛感させた。そうした歴史の重さに圧倒されそうになる中で、一条の光となったのが、現地の若者たちとの交流だった。吉林大学や遼寧大学で出会った学生たちは、非常に知的で、未来への希望に満ち溢れていた。彼らとの対話では、アニメや音楽といった共通の文化を通じて心を通わせる喜びがあった。互いの国の未来や個人の夢について語り合う時間は、国という大きな主語ではなく、一人ひとりの「個人」として向き合うことの重要性を教えてくれた。彼らの多くが、未来志向で日本との関係を築きたいと願っていて、その姿に、日中関係の未来への希望を見出すことができた。北京での歓迎晩餐会や瀋陽での歓送会といった公式な場も、そうした相互理解を深める貴重な機会となった。この旅を終えて、私の考えはより明確になった。日本の製造業が今後も世界で競争力を保ち、中国と建設的な関係を築いていくためには、単なる技術力や経済力の追求だけでは不十分だ。私たちは、過去の歴史に真摯に向き合い、中国の人々が抱える痛みを理解する努力をしなければならない。それは決して過去に囚われることを意味しない。むしろ、歴史の教訓を未来に活かし、二度と過ちを繰り返さないという固い決意の上に、真の信頼関係を築くための土台となるものだ。日中両国が、時には競争し、時には共創しながら共に発展していく未来を望むならば、歴史認識という避けては通れない課題から目を背けてはならない。粘り強い対話と交流を重ね、相互理解の努力を続けること。その先にこそ、真に平和で建設的な両国関係の

未来が開けるのだと、私は考えるようになった。この 1 週間で得た学びを胸に、将来、両国の架け橋となるべく、努力を続けていきたい。

訪中を終え、改めて中国の長い歴史と、芸術・食などの文化の豊かさを実感した。中国の人々がその土地を愛し、国の歴史を誇りに思う理由も理解できた。

訪中前からの自分の認識として、中国からの批判や警戒の背景には戦時中の日本の行いがあると理解していたが、それは今回の訪問で目にした様々な展示を通じて改めて裏付けられた。

一方で、現代中国に対しては異なるイメージも抱いていた。特に中央集権的な計画体制で発展した社会や監視社会への懸念である。しかし実際に中国で1週間過ごし、現地の人々の視点で考え直してみると、その合理性や背景をある程度理解できたようにも思う。

まず、多民族国家における「考え方の一致」の重要性である。歴史博物館や共産党展覧館を訪問すると、歴史認識や諸問題に関する国家としての立場が統一され、「～～精神」といった形で国民の模範的な心構えが強調されていた。これは経済計画においても同様で、多くの産業分野における明確な目標が示されていた。思想の多様性についての疑問は残るものの、ここ数十年の中国の急速な経済成長には、こうした一体感と揺るぎない計画の存在が多大な影響を及ぼしていると感じた。

また、監視やデータ駆動型社会についても、直感的にはプライバシーの面での懸念や理不尽な扱いへの不安が大きかった。実際に監視カメラの多さや、生体情報とID提示の多さには驚いたし、今も違和感が残っている。しかし一方で、それが治安維持に役立っていることや、便利なアプリの普及、スムーズな移動を可能にする社会基盤が整っていることを肌で感じられ、効率性という利点も理解できた。

さらに、日中友好を本当の意味で築くために考えさせられる点があった。中国の人々が日本人大学生に抱くスタンスは、大きく三つに分けられると感じた。

第一に、我々の世代も旧日本軍の行為の責任を背負い続け、謝罪を示すべきだという考え方。

第二に、戦時中の日本と現代の日本人は切り離して考えるべきであり、日本人大学生には特別な感情を抱かないという立場。

第三に、我々の世代もまた戦争の被害者であり、共に過去を振り返り批評する立場だという見方である。

第一の立場は、九・一八歴史博物館でのガイドの方の発言から感じ取れた。「なぜ現代の中国人は日本文化を好み、日本人を受け入れる優しさを持てるのか？」といった問いかけである。これには少なからず違和感を覚えた。なぜなら、その前提に立つと、どの世代も永遠に自国の過去に縛られることになってしまうからだ。ただし、その発想が生まれる歴史的経緯は理解できる。

第三の立場は、歓迎晩餐会での中国代表のスピーチにおいて明言されていた。国と個人を

分けて考える姿勢であり、私自身はこれこそが国民間の友好に必要な考え方だと感じた。いずれにせよ、歴史の捉え方は個人の自由であり、それにどう対応するかが我々の課題である。中国は今後も強い経済的プレゼンスを持ち続ける隣国であり、文化的にも密接な関わりを持つ。日本は国家として過去を繰り返さぬよう教育に努める責任があり、同時に我々国民は、多様な視点を理解し受けとめながら、より良い関係を築いていく努力が求められている。

日本海を挟んだすぐ先に広がる大国・中国。地理的には隣国でありながら、その実態や未来への展望について、どこか捉えきれない印象を抱いていました。長い歴史と豊かな伝統文化を有し、経済・政治・環境・科学技術など多方面において世界に影響を与える一方で、日本国内ではその姿がしばしば一面的に語られているようにも感じていました。

だからこそ、自らの目で確かめ、肌で感じる事ができた今回の訪問は、私にとって非常に意義深い経験となりました。とりわけ印象に残っているのは、中国の未来構想と都市計画におけるスケールの大きさです。訪れた都市では、整然とした街並みに高層ビルや集合住宅が立ち並び、都市全体が計画的に設計されている様子が見て取れました。再生可能エネルギーの導入やEV（電気自動車）の普及にも力が注がれており、東北地方では風力や太陽光による発電が盛んで、都市部には多くのEV充電ステーションが整備されていました。こうした光景からは、国家としての明確なビジョンと長期的な視点のもと、環境対策と都市開発を両立させようとする強い意志が伝わってきました。

もちろん、中国には広大な国土という物理的条件がありますが、それ以上に印象的だったのは、土地を「持つこと」ではなく「どう活かすか」に重きを置く国家戦略の明快さと、着実に実行する力です。都市の緑化も、景観の美化にとどまらず、都市熱の軽減や空気浄化を意識した緑地の配置、公園整備などが行われており、実際に市民の散策や休憩の場として活用されているような印象を受けました。こうした包括的で実行力のある都市設計からは、日本においても「限られた土地をどう使うか」「未来のためにどのような投資が求められるか」といった視点の重要性を改めて感じました。

また、現地の大学生との交流も心に残る体験でした。遼寧大学を訪問した際には、中国の学生たちが自国の発展に誇りを持ちながら、グローバルな視野で国際協力の必要性を語っていた姿が印象的でした。アジアやアフリカからの留学生も多く、授業や研究の現場に多様性が自然に根付いている様子がうかがえました。それぞれが中国との関係のなかで将来像を描こうとしており、中国が国際的な教育ネットワークの拠点として重要な役割を担っていることを知りました。

さらに、今回の訪問を通して、自分自身の内面にも大きな気づきがありました。それは「仲間の存在の大切さ」です。異なる文化や言語に囲まれた環境で、規律ある日程を共に過ごし、中国の伝統である円卓を囲み、美味しい食事をともにしながら語り合い、学び合い、笑い合った時間は、何にも代えがたい濃密な時間でした。仲間と過ごす中で得た視点や気づきは、自分一人では決して得られなかったものであり、学びは他者との対話を通じてこそ深まり、広がっていくのだと実感しました。

また、万里の長城を訪れた際には、雄大に連なるその姿に圧倒されると同時に、長い年月をかけて築かれてきた歴史の重みを肌で感じる事ができました。幾多の時代を越えて

今に残るその存在は、中国の歩んできた壮大な時間の流れを物語っており、書物では得られない深い学びがありました。さらに歴史博物館では、一つひとつの文物に宿る物語に耳を傾けながら、現在の発展がこうした歴史の積み重ねの上にあるのだと納得できました。仲間とともに歴史に触れ、対話を重ねた時間は、訪中体験をより豊かなものへと導いてくれたように思います。

今回の訪中を通じて得た最大の学びは、単なる知識や情報ではなく、「視座の転換」でした。中国という国を知ることで、日本を相対的に見つめ直す視点を得ることができ、国際社会のなかで未来をどう描き、どのように関わっていくべきかという問いに対して、自分なりの立脚点を見つける手がかりにもなりました。

このような貴重な機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

私は大学で、中国の古典文学や都市の歴史を学ぶ授業を履修し、中国語も学んでいる。さらに中国文化ゼミにも所属しており、周囲の学生よりも中国に対しては比較的親しみを持っている方だと思っていた。だが、今回訪中に参加して初めて実際に中国の地を踏むまでは、正直、ポジティブなイメージよりもネガティブなイメージの方が強かった。おそらくそれは、隣国でありながら日本と中国が現在まで十分に友好的な関係を築けていないという現実の表れだと思う。政治的な摩擦、メディアの報道、歴史問題など、私たちが日常的に接する中国の情報は、距離を感じさせるものが多い。だからこそ、実際に現地に行き、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じることは大きな意味があると感じた。特に心に残っているのは、瀋陽で訪れた「918 歴史博物館」と、長春で訪れた「東北陥落史陳列館」だ。ここでは、かつての日本軍の行動が多くの写真や資料とともに展示されており、非常に衝撃を受けた。教科書では「満洲事変」や「日中戦争」などとしてさりとて学んだことも、現地では「侵略」として語られ、記憶されている。写真に写る人々の表情、当時の新聞、証言の数々に触れ、日本人として目を背けてはならない歴史が、確かにそこにあると感じた。何よりも強く思ったのは、「日本人が知っておくべきなのに、多くの日本人が知らない歴史がある」という事実である。私は中国文化を学んでいる学生として、ある程度は知識があるつもりだったが、それでも現地に行かなければわからないことがたくさんあった。日本国内だけで完結する歴史教育では、どうしても見えなくなってしまう視点がある。そのことに気づけたのが、今回の訪中での最大の収穫だったように思う。一方で、暗い歴史だけではなく、明るい未来を感じさせてくれた出会いもあった。長春では吉林大学の学生たちと交流する機会があり、互いに言語は完璧ではなかったが、笑顔とジェスチャーと、共通の関心を通じて、すぐに打ち解けることができた。彼らと話す中で、「人と人」でつながれば、国と国の関係を超えて、分かり合うことができると実感した。また、歴史や人との交流だけでなく、中国の壮大な文化や自然にも感動した。北京では故宮や万里の長城を訪れ、そのスケールと歴史的価値の大きさに圧倒された。中国という国が、どれほど深い歴史と文化を抱えた存在なのかを改めて実感した。訪れた都市ごとに、街並みや空気感も大きく異なっていた。北京は首都らしく洗練されていて活気があり、瀋陽は歴史の厚みを感じさせる都市だった。その中で、個人的に最も印象に残ったのが長春だった。街の雰囲気や建築、そこに住む人々の様子が自分の感性に合っていて、「また行きたい」と思わせてくれる場所だった。今回の訪中を通じて、「中国を学ぶ」という姿勢が、「中国を知る」こととは違うのだと気づかされた。知識だけではなく、実際に現地に行き、自分の身体を通して経験することが、理解への第一歩になる。だからこそ、今後もこうした訪中の機会があるなら、ぜひ積極的に参加していきたい。そして、そこで感じたことや学んだことを、日本に戻ってから

周囲に伝えていくことも、自分にできる大切な役割だと思う。歴史に向き合うことと、人とつながること。その両方が、未来の日中関係をよりよいものにしていく鍵だと強く感じている。

今回の7日間の訪中は、自分にとって初めて本格的に中国を見て回る経験になった。出発前は、中国という国を正直「近いけれど遠い国」と感じていて、ニュースや授業で聞くような政治的な話題や日中間の歴史問題がまず頭に浮かんでいた。けれども、実際に北京・長春・瀋陽を訪れて、自分の中で中国のイメージが少しずつ変わっていった。最初の北京では、とにかくスケールの大きさに圧倒された。街の広さ、建物の大きさ、人の多さ、どれをとっても「大国の首都」という言葉がぴったりだった。歴史や政治に関わる建物を訪れたときは、ただ観光名所として眺めるのではなく、そこに込められた意味や人々の誇りを感じた。説明を聞いている中国の若者の真剣な表情や、建物の重厚さからは「自分たちの国の歩みを大切にしている」という強い思いが伝わってきた。日本でニュースを通して見ていた中国はどこか抽象的だったけれど、現地に立つことで、その存在感を肌で実感することができた。次に訪れた長春では、北京とは違い落ち着いた雰囲気の中で、歴史をじっくりと感ずることができた。政治や歴史に関する建物や展示を見ながら、「このとき中国はどんな状況にあったのだろう」「日本はその時代にどう関わっていたのだろう」と、自分の中で問いが次々に浮かんできた。中国の人々にとっては過去の出来事が現在のアイデンティティと深く結びついているのを感じ、自分自身の歴史認識を振り返るきっかけになった。特に同世代の中国の学生とすれ違ったとき、「同じ世代なのに、歴史に対する感じ方はどう違うんだろう」と考え、もっと相手の考えを直接聞いてみたいと思った。最後に訪れた瀋陽は、個人的に最も心に残った。瀋陽はかつて満州国の首都であり、日本と深く関わりのある場所だ。その土地に立つと、教科書で学んできた歴史が急に現実味を帯びて迫ってきた。日本人として複雑な感情を抱いた一方で、現地の人々がその歴史を単なる「過去の傷」としてではなく、「未来にどう生かすか」という視点で語っていたのが印象的だった。歴史を直視しつつも前向きに受け止めている姿に、自分も学ぶべきものがあると感じた。この7日間を通じて気づいたのは、国としての中国は確かに大きく、政治的にも歴史的にも日本と違う面が多いけれど、そこに暮らす人々は驚くほど親しみやすいということだった。街で道を尋ねたときに笑顔で教えてくれたり、写真をお願いすると快く応じてくれたり、そうした小さな交流が積み重なることで、自分の中にあった「中国は近寄りづらい国」という印象が少しずつ和らいでいった。結局、人と人の関係はシンプルで、互いを知ろうとする姿勢さえあれば心の距離は縮まるのだと思う。では、日本はそして自分は、今後中国とどう向き合っていくべきか。今回の経験を通じて思ったのは、相手を「理解しようとする姿勢」を持つことの大切さだ。政治や歴史の問題は簡単に解決できないけれど、それを理由に距離を置いてしまえば理解は深まらない。私は国際関係を学ぶ立場として、この体験をきっかけにさらに中国への理解を広げ、互いに歩み寄れる関係づくりを考えていきたい。この7日間は、自分にとって大きな転機だった。中国を「遠い隣人」で

はなく「身近な隣人」として意識するようになったこと、それ自体が自分の人生にとって大きな意味を持った。今後の学びや交流の中で、この経験を忘れずに生かしていきたいと思う。

私は日中友好大学生訪問中国の一員として、約一週間にわたり北京、長春、瀋陽の3つの都市を訪問し、特に中国視点の歴史を学ぶ貴重な機会を得ました。今回の訪中は、単なる観光ではなく、両国の歴史や文化を深く理解し、相互理解を深めることができたと考えます。実際に現地で生活し、現地の方々と直接交流することで、教科書やメディアだけでは得られない生の情報や感覚を体験できたことは非常に有意義でした。

現地での歴史展覧会や博物館の見学を通じて、これまで日本で学んできた歴史とは異なる、中国側の視点からの歴史認識に触れることができました。例えば、歴史博物館で、日本軍の第100部隊について語られていたが「日本軍の第100部隊本部は撤退する前に保存用文書と実験試料を焼却し、建築施設を破壊し細菌兵器実験の罪証を破壊した。」や、「日本軍国主義者は残忍非道な細菌戦手段で中国軍民を殺害し、そして、唐と死に追い込んで中国軍民を屈限させようと企んだ。侵略者の残虐行為に直面して、中華子孫たちは屈せず。血を浴びて奮戦し、日本軍国主義の食感を徹底的に打ち良かし、抗日戦争の偉大な勝利を獲得した。

日本政府と軍部は中国に対する細菌戦に直接関与した。今日に至って、日本政府は中国侵略戦争期間中に細菌戦を実施した事実を依然として否認し、更に日本軍の細菌戦による深刻な被害を受けた中国人民に対して謝罪と賠償をおこなっていない。時代が移り代わっても歴史が変わることはないし、言い逃れによって事実が消えることもない。決して歴史の表を二度と繰り返さない。それは後世の人々があの時代に人類の自由、正義、平和を守るためにになった盗、及び惨殺された罪のない亡き霊に対する最高の遺産である。中国を侵略する日本軍が中国人民に対して犯した残酷非道な細菌数犯行は、数象期間中に食に残虐な反人道的暴行の典型的な愚行である。なぜ我々は日本に者の残虐性を非難するのか？それは善良な人々の平和への憧れと堅守を喚起するためである。我々はなぜ痛ましい歴史を振り返るのか？それは中国人民が世界ファシズム象感利の成果と世界の公平、正義を守る確固たる決意を示し、中国人民が歴史をしっかりと記憶し、過去を忘れず、平熟を大切に、未来を切り開く積極的な姿勢を示すためである。」と記されていた。このように歴史的事件に対する解釈や背景の説明が、日本の教科書とは異なり、より中国の立場や感情が反映されていることに気づきました。この経験は、歴史は一面的ではなく、多角的に見ることの重要性を教えてくださいました。また、現地の方々との交流を通じて、歴史を通じた日中の関係性の複雑さや、未来に向けた友好の大切さを肌で感じるすることができました。歴史の違いを理解し尊重することが、真の友好関係を築くための第一歩であると強く感じました。さらに、文化や価値観の違いを乗り越え、相互に学び合う姿勢が、これからの日中関係においてますます重要になると確信しました。

今回の訪問で得た知識と経験は、私の視野を広げるだけでなく、今後の人生や学びにおい

でも大きな財産となりました。これからは、日中両国の相互理解を深める活動に積極的に参加し、歴史の違いを超えた友好の架け橋となれるよう努力していきたいと思います。